

終助詞「さ」による反語表現に関して

長崎靖子*

A Study of the Ironic Expression of the Final Particle *sa*

Yasuko NAGASAKI

要 旨

本稿では、終助詞「さ」による反語表現について考察した。江戸語の終助詞「さ」は、否定表現「～なくて」、「～ないで」に連なることにより反語の意味を有する。本研究では江戸から明治、大正に至る口語資料より、この終助詞「さ」の反語表現を採取し、「さ」が含まれた反語表現の意味を観察した。

その結果、終助詞「さ」の反語表現は、否定とは逆の意味を相手へ強く訴えかける働き、すなわち「のだ」文的性格のものであることが明らかとなった。そして、この反語表現が「のだ」の意味を有するのは、江戸語における終助詞「さ」に断定の働きが強かったためであることを指摘した。

さらに、「さ」による反語表現が衰退していく原因は、「さ」が断定の助動詞的な役割から、本来の終助詞の機能へ落ち着いたこと、そしてこれに加え、近代におけるコミュニケーション形態の変化によるものという結論を導き出した。

キーワード：終助詞「さ」、反語、否定表現、コミュニケーション形態

1. はじめに

本稿では、終助詞「さ」による反語表現について考察する。筆者は拙稿（1998）で、江戸から大正に至るまでの終助詞「さ」に関する調査を行なったが、その際、次のような「さ」の用例を発見した。

*教授 日本語学

かみ なんのいな。べいへことば詞がなんでわけ訳があるぞいな
01 山 訳がなくツてさ。うそならわつちがうち内へ来てかきつけ書付をみなせへ

式亭三馬『浮世風呂』二編 卷之上

これは、風呂の中で江戸の女性と上方出身の女性が、江戸ことばと上方ことばの優劣を戦わせている場面である。「べいべいことば」を馬鹿にする上方女性に対し、江戸者のお山が、「べい」は「べし」に通じるもので「万葉集」にまで遡る由緒正しき言葉であると言いつけている。01の「訳がなくツてさ」（用例の下線は筆者による。以下同）は、上方の女性が「べいべい言葉にそのような由緒があるものか」と言ったのに反論し、「きちんとした由緒がないことがあるうか、あるのだ」と述べた言葉で、否定の「なくツて」に「さ」がつくことにより、反語の意味を有している。

現代語⁽¹⁾で同じように「なくって」に「さ」がついた場合は、

とんでもない。リバウンドしたまま、なかなか戻らなくってさ。自信喪失よ。

林真理子著『美女に幸あり』より

のように、話者が確認していることを話し相手に訴えかける終助詞として機能し、反語の意味は見られない。

今回は、江戸語の終助詞「さ」に見られる反語の表現が、いつ頃まで見られるかを観察し、拙稿（1998）で考察した終助詞「さ」の機能的変遷との関わりを探ることとする。

今回の調査資料は、拙稿（1998）で使用した口語資料⁽²⁾のほか、嘶本、人情本、落語速記⁽³⁾、「太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース」（国立国語研究所編）を使用する。また、調査は「なくってさ」の他、「なくてさ」「ないでさ」に関しても行う。

2. 反語表現とは

用例調査に入る前に、本稿における反語表現について定義をしておく。「反語」は、辞書の中で次のように定義されている。

⑤断定を強めるために、肯定の疑問または否定の疑問の形で問いかけ、当然の応答として反対の結論を読者に要求する表現。「思わざるべけんや」「思わましやは」「来るべきもの

かは」などの類。

『日本国語大辞典』第二版（2000）

①断定を強めるために、言いたい内容の肯定と否定とを反対にし、かつ疑問の形にした表現。「そんなこと知るものか」の類。

『広辞苑』第六版（2008）

①上の語句を受けて文末を疑問の語で結び、相手に問いかける表現によって、上の語句の意味を強く打ち消す語法。「そんなことがあるものか」「どうして黙っていられようか」など。

『新潮現代国語辞典』第二版（2000）

上記の辞書の他にも「聖職者がこんなことをするだろうか」「冗談でこんなことが言えるだろうか」『明鏡国語辞典』初版（2003）、「これを不正と言わずして何と言うのでありましょうか」「天涯の孤児を助ける者は終に一人もないのでしょうか」『新明解国語辞典』第六版（2005）など、反語は現代語においては、多く終助詞「か」にマークされる表現形式であることがわかる。文末のイントネーションにより反語の意味を有する場合もあるが、終助詞「か」という疑問の形を呈しながら、その真意として反対の意味を強く表現する形式が一般的である。本稿では反語表現を、「真意とは逆の表現形式を取ることで、真意を強める働きをする表現」と定義し、この反語表現と終助詞「さ」の働きについて考察する。

3. 江戸時代の終助詞「さ」の反語表現

まず、江戸時代の用例から観察する。筆者が調査した資料の中では、式亭三馬『浮世風呂』（文化6～10年）に最も早く反語表現に関わる「さ」の用例が見られる。『浮世風呂』には、「1. はじめに」であげた用例のほか、「なくてさ」の形式が2例見られる。

とび ナニサ、そうでもねへよ。あゝ見えてもやかましいはな
02 した そりやア些らづゝのことは無てさ。おらが内じやアちよいと踏ばづすと直に横ぞ
つぼうだ。

- ▲ それで一倍我侬を云つてやかましくてならねへ
 03 ● (略) 蟻の思ひも天にとゞくとやらでの。一心に介抱すれば、また能日の照ることが
 なくつが無てさ。兎角神仏を信心しなせへ。(略)

02は長屋に住む「とび」と「した」という女性の会話である。自分の亭主をほめた「した」に「あゝ見えてもやかましい」と「とび」が言ったのに対し、「そりやア些らづゝのことは無てさ」と答えた場面である。「亭主というものはうるさいところはないだろうか。いや少しはあるのだ」という意味で、反語表現であることがわかる。03は、老婆と女房の会話で、連れ合いの介護でぐちをこぼしている老婆に対し、女房がたとえを使ってなくさめている場面である。「また能日の照ることがなくつが無てさ。」は、「一生懸命介抱すれば、良い日が照る（病人が回復する）ことがないだろうか。いやあるのだ。」と解することができる。

『浮世風呂』には「なくってさ」の他、「ないでさ」の反語表現も2例見られる。

- もし、静におつかいなさい。はねがかゝりますよ
 04 した アイ。それだ から御免なせへと云ひやす。人込のなかだはな。些ははねもかゝ
 らねへでさ。

- 作 ハテ、どうせ跡は引裂く物だア。主達の様に云ちやアはじまらねへ
 むだ それで済んだか
 05 作 済ねへでさ。そこは江戸ツ子だア

04は02の用例と同じ女性の言葉に見られるものである。乱暴にふろに入ろうとする「した」に、そばにいた人が「はねがかかから、静かに入ってください」とたしなめる。これに対し、「した」が怒り、「人が多いから、少しははねがかかからないことがあろうか。かかるのだ」と述べた場面である。05は鉄砲作と呼ばれる男性とむだ八の会話である。鉄砲作が喧嘩の仲裁に手紙を書いた話をしている場面で、むだ八が「それで済んだのか」といったのに対し、「江戸っ子の仲裁だから、済まないことがあろうか。きっちりかたをつけたのだ」と自慢げに述べた言葉である。

『浮世風呂』には「なくてさ」の用例も1例見られる。

- さる 此おばさんは馬鹿なことばつかりいふは。ホンニへ、いつも若い元氣だ

06 とり わかなくくてさ。おばゞ四十九で信濃へ嫁入といふけれどしのの よめいりの。

悲観的なことばかり述べる「さる」と楽観的な性格の「とり」の会話で、06は「さる」が「とり」に「いつも若いね」と言ったのに対し、「若くないことがあるか。まだまだ若いのだ」と話す場面である。以上、『浮世風呂』には否定表現に「さ」を付した反語表現が6例見られる。

江戸時代の用例は、『浮世風呂』の他の滑稽本、噺本、人情本にも見られる。『浮世風呂』よりやや時代の下った滝亭鯉丈の滑稽本『八笑人』一～四編（文政3～天保5年）には、2例の用例が見られる。

のろ 卒公マア案事あんじはついてゐるか

07 卒八 ヘンなくつてサ

左次 およぎを知らねへでは、勤つとまらねへトいうふ舞臺ぶたいもねへもんだ

08 卒八 なくつてサ、水仕合みづじあひといふ事もありマアす

左次郎を中心とする八人が、茶番で皆を驚かそうと話し合っている場面である。07はのろ松が卒八に茶番の計画は考えてあるのかと質問したのに対し、卒八が「考えていないことがあるか。あるのだ」と答えている場面である。08は左次郎が「泳げなければ、役者ができないなどという舞台はない」と言ったのに対し、卒八「ないことがあるか。この茶番劇ではそうなのだ」と言い返している場面である。

人情本では業亭行成の『藪の鶯』（文政10年）に1例、二世楚満人（為永春水）の『寢覚之繰言』（文政12～天保元年）に1例、『春色辰巳園』（天保4～6年）に2例、曲山人の『娘消息』（天保7）に1例が見られる。ここでは『春色辰巳園』の「なくつてさ」の1例と、『娘消息』の「ないでさ」の1例をあげておく。

仇 ナニおかしいものか。それよりやア今いまのことを急度きつとだヨ

09 丹 きつとでなくツてサ。急度きつとでなかアどうする

『春色辰巳園』

お初 私なんざアさう云ツちやア何だけれど彼の人より外いいとこほに、美男だ惚れたと思ふ人は一人もいないよ

おべそ オヤきついこつたネエ、大層おのろけだよ
10 お初 のろけないでさ

『娘消息』

09は、芸者の仇吉と丹次郎の会話である。自分の情人になってほしいと頼む仇吉に「ならないことがあろうか。きつとなるのだ」と答えている場面である。10は恋人の徳兵衛のことをのろけるお初に対し、おべそが「大層おのろけだよ」といった言葉に答えたもので、「のろけないでさ」は、「のろけないことがあろうか。大いにのろけるのだ」という意味である。

断本の中で、「さ」による反語表現の用例は『百面相仕方ばなし』（天保13年）に2例見られる。

11 ○ さしミでいつぱいやらかして、なかおちハにつけだ。うまいへ。ナニごうぎにしやぶる。しゃぶらねへでサ。ほねについた身がうまい。

「のどへとげ」

12 □ 酒ハのむべしあびるべした。のまねへでサ。てめへものんだか。

「礼者のなまゑい」

11は、初がつおがあまりにおいしいので、骨までしゃぶってのどにとげが詰まった話で、「骨までしゃぶらないことがあろうか。しゃぶるのだ」と述べている場面である。12は年始参りをしている生酔いが「酒は飲まないものであろうか。飲むものなのだ」と述べている場面である。

また、『百面相仕方ばなし』（天保13年）には、終助詞「よ」を使った反語表現の例も見られる。

★ なんだ、つばきがはねる。はねねへでヨ。この角力ハせきとせきだもの

「角力ずき」

相撲の滑稽話の中で、「つばきがはねる」と言ったのに対し「咳と咳の相撲だからはねないことがあろうか。はねるものなのだ」という落ちの場面に見られるものである。この文においては終助詞「さ」と同様の役割を「よ」が担っていると考えられる。

4. 明治以降の終助詞「さ」の反語表現

終助詞「さ」を使った反語表現は明治期の資料にも見られる。二葉亭四迷の『浮雲』（明治20年）には、お政の言葉遣いに2例見られる。

お勢 アラ喰って懸りはしませんワ

13 お政 喰って懸らなくってサ……私はもうもう腹が立て腹が立て堪らなかつたけれども、何してもこの通り気が弱いシ、それに先には文三という荒神様が附てるからとても叶う事ちゃア無いとおもって、虫を殺ろして噤黙てましたがネ……

お勢 何ですネー母親さん、他人の収入を……

14 お政 マアサ五円殖えて三十五円、結構ですワ、結構でなくってサ。貴君どうして今時高利貸したって月三十五円取ろうと言うなア容易な事ちゃア有りませんヨ…

13は役所を罷免になった文三を庇ったお勢に対し、母のお政が本田に愚痴をいっている場面である。お勢が「喰って懸かってはいない」と言った言葉に反論し、お政は「喰って懸かっていないだろうか。いや喰って懸かったのだ」と述べている。また14は本田の給料が上がったことを知ったお政が、「結構でないことがあろうか。結構なことなのだ」と喜んでいる場面である。

落語の速記本では「麩焼失」（初代三遊亭遊三口演、酒井昇造速記 明治23年『明治大正落語集成』所収）に用例が3例見られる。

親分 是は比喩の話だがノ、お前解るかエ

15 女 了解なくってサ、生活てるもの

親分 然一言へにお前は口が多いから不可い。アノネ、漢土を知っているかエ

16 女 蜀黍……知つてなくってサ、団粉にする彼でせう

八 どうしたんだ、怒るとピヨイへ出て勝手な時に帰つて来て何が只今だヨ、マ昇んねエ

17 女 昇らなくってサ、自分の宅だもの

15, 16 は気の荒い髪結いの女房が亭主と喧嘩をして、親分のところへやってきた場面である。15 は女房の気を静めるため、喩えの話をしようとする親分に答えている場面である。「是は比喩の話だがノ、お前解るかエ」という問いかけに「わからないとことがあるか。わかるのだ」と述べている。16 は親分が「漢土（中国）」^{もろこし} といったのに対し女房が「蜀黍」^{もろこし} と間違えているにもかかわらず、「知らないとことがあるか。知っているのだ」答えている場面である。17 は家に戻った女房に亭主が「家に上がりな」と言ったのに対し、「自分の家なのに、上がらないとことがあるか。上がるに決まっているのだ」と述べた場面である。

『雑誌 太陽』コーパスによる調査では、明治 28 年（1895）の雑誌の中に 2 例、大正 14 年（1925）に 1 例の用例が見られた。

18 お村 私が死んだら家爺さんの傍へお出でツてお云ひだツたから、行うと思や行けなくツてさ

広津柳浪「狂言娘」『雑誌 太陽』1895

兼五郎 サア持て行け。

19 お品 持て行なくつてさ。

幸堂得知「心中女」『雑誌 太陽』1895

爺つあん ほんとに居場所を知つてゐるのか？

20 文 知つてゐなくてさ。大知りだ。

国枝史郎「長篇小説 鼬つかひ」『雑誌 太陽』（第三回）1925

18 は、お村が「自分が死んだら父親の所へ行くようにと母お松がいったのだから、行こうと思えばいけないことはないのだ」と、お松の遺言を独白している場面である。19 は、兼五郎がお品に離縁状を「持っていけ」と投げつけたところ、お品が「持っていかないとことがあるか、持っていくに決まっているのだ」と、離縁状を掴んで悠々と去っていく場面である。20 は、葉村座の興行主の爺つあんが、釜無しの文という昔の仲間に女軽業師紫錦の居所を尋ねた場面で、釜無しの文が「知らないとことがあるか。よく知っているのだ」という意味で「知つてゐなくてさ」と述べている。

以上が、調査した資料の中での「さ」による反語表現の用例である。上記の調査の中で、終助詞「よ」を使った反語表現も 1 例あげたが、調査資料の中ではこの『百面相仕方ばなし』（天

保13年)の1例以外は見られなかった。ただ、拙稿(2008)で、現代における終助詞「さ」の調査をした際、久保田万太郎の『春泥』(昭和2年)に次の「よ」の用例が見られたので、ここにあげておく。

★ 三浦 行かなくてよ。一二三日つゞけて行ったが面白くねえから止した

『春泥』

これは、下町の芸人同士の会話で、「釣堀に行ったか」と聞かれた三浦が、「行かないことがあるうか。続けて行ったのだ」と話している場面である。

「なくてよ」という言葉遣いに関しては、明治21年、尾崎紅葉の「流行言葉」(『貴女之友』25号)に見られる。紅葉はここで「今より八九年いま前ねんぜん小學校せうがくかうの女生徒ぢよせいとがしたしきあひだ間の對話たいわに一種異様なる言葉ことばづかひせり。」として「(梅はまだ咲かなくツテヨ)」という表現を紹介している。しかしこれは、いわゆる「テヨダワ」言葉といわれる当時の女性語で、「梅はまだ咲いていない」という意味であり、反語表現とは異なる。

終助詞「よ」に関しては、拙稿(2004)で、断定の働きをする「よ」(以下断定「よ」とする)の調査を行い、断定「よ」が女性語として広まっていく過程を考察した。そして、断定「よ」は、明治以降女性語として使用されるようになり、一方ぞんざいな会話に使用される断定「よ」は、下町のぞんざいな言葉遣いの中に残されていることを示した。『春泥』に見る「よ」は、江戸語の流れをひく下町言葉を使う人物に使用された用例である。「さ」に関しては、拙稿(2008)の昭和初期からの終助詞「さ」の調査では、反語表現にあたる用例は見られなかった。が、終助詞「よ」と同様に、江戸語の名残のある人物の言葉遣いにはまだ残されている表現ではないかと考えられる。

5. 反語表現における終助詞「さ」の機能

さて、終助詞「さ」による反語表現を、江戸から大正まで観察してきたが、次に終助詞「さ」を使うことにより、なぜ反語の意味が発生するのかを考えていくことにする。これまでに得られた用例から終助詞「さ」の反語表現を観察すると、「さ」が含まれた反語表現は、いずれも真意とは逆の表現形式を取ることにより、話者が確信していることを相手に強く訴えかける、という意味を有していることがわかる。筆者は、この終助詞「さ」の働きは、拙稿(1999)で考察した「動詞連用形+て+さ」(以下「てさ」形式とする)に関連した働きと考える。

拙稿(1999)では、江戸語の「てさ」形式が、待遇表現を伴う西部待遇表現「動詞連用形+て+指定辞」に類似した働きを持つことから、江戸語の終助詞「さ」の断定機能を強調した。拙稿の中では、山崎(1963)で指摘した待遇表現に関係しない「動詞連用形+て+指定辞」と「てさ」形式に関しても考察した。山崎(1963)では、待遇表現に関係しない「動詞連用形+て+指定辞」の例を次のように紹介している。

- おゝそれはそちが心を疑ふてじや、こらへてくれよ、(兄→弟・武士)

〔今川仮名手本〕宝永4年『新群書類従 三』P.483上

- 私が(少将様ノ)お心に従わぬは、少将様の為を思うてじや。(小町→少将の弟)

〔百夜小町〕元禄10年『近松歌舞伎狂言集』P.53上

「疑うてじや」「思うてじや」の主体は話者であり、山崎はこれらの意味を「疑うて自分はソウシタノじや」「思うてソウシタノじや」の意」で、省略形である

この分類に基づき、拙稿(1999)では「てさ」形式を分類し、「てさ」形式の中にも待遇に関係しない用例があることを指摘した。例えば『春色梅児誉美』に見る次のような用例である。

藤 ヲヤ小用かとおもつたら平岩の使か(略)(藤→由)

由 ナニ今あの子が歸りますヨ(由→藤)

★藤 ほかの用じやアねへが、おめへの好な玉子蒸をこしらへさせやうと思つてサ。(略)(藤→由)

これは、藤兵衛が恋仲のお由のために、料亭から料理を取り寄せた場面である。この場面では「思つてさ」は、「玉子蒸をこしらえさせようと思つて平岩の使いを呼んだのだ」の意味であり、山崎(1963)で指摘されている、理由を説明する「動詞連用形+て+指定辞」と同じ働きをする。

この「てさ」形式の「さ」と同様に、否定表現に連なる終助詞「さ」も、話者の確信していることを相手に説明的に訴えかける「のだ」の意味を有していると考えられる。

終助詞「さ」を除いた否定表現「なくつて」のみでも、反語的な意味を有する場合があるが、これらは、特に明治以降の女性の言葉遣いに見られるもので、意味合いも「のだ」とは異なる。二葉亭四迷の『浮雲』に見られる用例を見てみよう。

21 お勢 用をしていると返答は出来なくって？

お鍋 御免遊ばせ……何か御用？

21の例は、呼びかけになかなか答えないお鍋に対し腹を立てたお勢が述べた言葉で、「用事をしていないと返事が出来ないのか。出来るだろう」と、非難を込めた反語的表現になっている。また、夏目漱石の『道草』には次のような用例が見られる。

22 細君 みんなで交際^{つきあ}っちゃいけないって忠告でもなさるんじゃないやなくって。御兄^{おあにい}さんもいらっしゃると書いてあるでしょう、其所^{そこ}に」

23 細君 貴夫^{あなたもと}故^{もと}のようになって下さらなくって

22の用例は、細君が健三に、健三の育ての親嶋田と付き合っではいけないと兄が忠告するのだろうと述べている場面である。23は細君が元のようになってほしいと健三に頼む場面である。両者とも「なくって」という言葉を使い、反対の推量や願望をこめた意味となっている。これらは、現代語の中で「明日映画に行かない？」や「一緒に行ってくれない？」などと同様の意味となり、終助詞「さ」を加えた場合のような「のだ」文のように聞き手に訴えかける意味合いはない。「のだ」の意味は終助詞「さ」を付して初めて生まれるものである。否定表現に終助詞「さ」がついた場合、「なくってさ」が「ないことがあろうか。あるのだ」の意味を有するのは、否定表現の中に含まれた非難や推量、願望という話者の気持ちに終助詞「さ」が付くことにより、確信的に聞き手に伝えられるからと考える。先に述べたように、これは江戸語において終助詞「さ」の断定辞の働きが強かったために成立する表現といえよう。

5. 終助詞「さ」を伴う反語表現の衰退原因

現在では「なくってさ」に連なる「さ」は、話者の気持ちを相手へ訴える、終助詞の役割として働いている。「1. はじめに」で示したように

とんでもない。リバウンドしたまま、なかなか戻らなくってさ。自信喪失よ。

林真理子著『美女に幸あり』

などの用法である。このように終助詞「さ」の役割が変化したのは、一つは、拙稿（1998）で考察したように、断定辞の働きが断定の助動詞「だ」や「です」に集約されることにより、江戸語の「さ」の主たる機能である断定表現が「さ」から薄れていったためと考えられる。拙稿（1998）では江戸語から東京語にかけて終助詞「さ」に生じたこの機能的変化の原因を、近代語における文法的機能の整理によるものとした。近代において、知識階級の東京語が共通語となる過程で、より明確な表現が求められるようになり、それぞれの語が持っていた機能の分析的傾向⁽⁴⁾が進む。この経過は、中村（1957）、田中（1958, 1965）等の研究に詳しいが、その中で起こった現象の一つとして、幕末あたりから断定の文法的機能も整理が行われ、その結果、終助詞「さ」の断定機能が衰退した。「なくてさ」が持つ反語表現では、終助詞「さ」の強い断定機能が必要とされたため、断定機能の衰退した終助詞「さ」では、反語表現が成り立たなくなると推測できよう。

終助詞「さ」の他、断定辞として働く「よ」にも同様のことがいえる。現在でも江戸語の名残りのある下町言葉の中には、このような反語表現が残されているかもしれないが、共通語における終助詞「さ」や「よ」の用法には見られない。

さらに、これらの反語表現が衰退していくのは、やはり時代によるコミュニケーション形態の変化も原因の一つと考えられる。筆者は拙稿（2008）の中で、現代語の中では「さ」が終助詞として機能する例自体が少なくなっていることを指摘した。そして、これは終助詞「さ」が持つ相手を説得させるような訴えかけが、若い世代に合わないことが原因であろうと推測した。反語表現に関わる終助詞「さ」は、かなり強い訴えかけをもった表現であり、東京語が共通語となる中で、終助詞「さ」を伴う反語表現が衰退していくのは、強い訴えかけを持つ「さ」が、近代のコミュニケーション形態にそぐわなかったことも、要因の一つであったといえよう。

6. おわりに

本稿では、終助詞「さ」を伴う反語表現に関して考察した。そして終助詞「さ」が反語を形成する理由、またそれが衰退していく理由は、拙稿（1998）で述べたように、終助詞「さ」の断定機能の衰退が原因であると結論付けた。

終助詞「さ」に関しては、拙稿（1998）の追調査として行なった拙稿（2008）で、終助詞「さ」自体の使用が現代の若者に減少し、間投助詞としての役割に偏っている点を指摘した。この現代における終助詞「さ」の使用に関しては、今後自然会話を資料として、さらに考察を進めたいと考えている。

注

- (1) 本稿では「現代語」を現代の共通語という意味で使用している。
- (2) 拙稿（1998）で使用した調査資料は次の通りである。
 - 「男伊達初買曾我」『歌舞伎台帳集成 第八巻』（1985）
 - 「辰巳之園」「遊子方言」「浮世床」『日本古典文学大系 47』（1971）
 - 「浮世風呂」『日本古典文学大系 63』（1959）（但し「浮世風呂」の前編は『新日本古典文学大系 86』（1989）を使用。）
 - 「八笑人」「和合人」「七偏人」『花暦ハ笑人 滑稽和合人 妙竹林話七偏人』有朋堂文庫（1918）
 - 「春色梅児誉美」「春色辰巳園」『日本古典文学大系 64』（1962）
 - 「牛店雑談 安愚楽鍋」『日本近代文学大系 1 巻』（1970）
 - 「怪談牡丹灯籠」『明治文学全集 10』（1967）
 - 「当世書生氣質」『明治文学全集 16』（1969）
 - 「浮雲」『日本近代文学大系 4 巻』（1971）
 - 「草枕」『日本近代文学大系 25 巻』（1969）
 - 「三四郎」『日本近代文学大系 26 巻』（1972）
 - 「道草」『日本近代文学大系 27 巻』（1974）
 - 「腕くらべ」『日本近代文学大系 29 巻』（1970）
- (3) 噺本は『噺本大系』全 20 巻の中から、文化文政以降の江戸の噺本を選び調査した。人情本は、拙稿（1998）の調査資料以外に、『寢覚え繰言』『娘消息』（人情本刊行会編）を使用した。落語速記は『明治大正落語集成』の第 1 巻を使用した。
- (4) 「分析的傾向」に関しては、中村（1957）で、現代語における明晰な表現への要求という観点から論じられている。田中（1958）では、現代東京語の三面性（公用語、日常語、共通語）をあげ、公用語の性質として、叙述内容の客観的表現、言い分け、待遇表現の発達を述べている。また田中（1965）では、江戸語から現代語への過程で「整理」「単純」「分散」という分析的傾向が進んだことを指摘している。

参考文献

- 田中章夫, 1958, 「語法からみた現代東京語の特徴」, 『国語学』, 国語学会, 34 集
- 田中章夫, 1965, 「近代語成立にみられるいわゆる分析的傾向について」, 『近代語研究』, 近代語学会編, 第 1 集, 武蔵野書院
- 中村通夫, 1957, 「現代語の特徴」, 『NHK 国語講座 現代語の傾向』, 日本放送協会編, 宝文館
- 山崎久之, 1963, 『国語待遇表現体系の研究』, 武蔵野書院
- 長崎靖子, 1998, 「終助詞「さ」の機能に関する一考察」, 『国語学』, 国語学会, 192 集
- 長崎靖子, 1999, 「江戸語の「動詞連用形+て+さ」表現形式に関する一試論—西部待遇表現「動詞連用形+て+指定辞」との関係から—」, 『国文目白』, 日本女子大学国語国文学会, 第 38 号
- 長崎靖子, 2004, 「江戸語から東京語に至る断定辞としての終助詞「よ」の変遷—断定辞としての終助詞「さ」との比較から—」, 『近代語研究』, 近代語学会編, 第 12 集, 武蔵野書院

長 崎 靖 子

長崎靖子, 2008, 「現代語の終助詞「さ」の機能に関する考察」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 川村学園女子大学図書委員会編, 第19巻, 第2号